

楽園にかえる 原始生活入門

文と絵 水木しげる



日本でゼニがなかったらインスタントラーメンも食えない地獄だが、我が南方の島々ではゼニがなくても極楽だ。極楽とは文字の如く、極く楽しい、その証拠に極楽鳥も住んでいる。

これを楽園といわずしてなんといおう。

ぼくは土人部落（日本の上等の雑誌ではしばしば土人を失礼だというので原本人となおすくせがあるが、土人とは文字の如く土の人であって、原本人では東南アジア的な感じしか出ないのであえて土人とかく）をおとすれる度に、戦後みたゲリー・クーパー主演の「楽園にかえる」という奇妙な土人映画を思い出す。素朴な船員が島にきてきた娘を思い出して、遂に南の島の住人になる話だが、ぼくは娘はおいてこなかったが三十年前に知りあいになったトモダチがいる。そのトモダチを介して、二、三度訪問するうちにその南の島が楽園であると確信するようになった。

*

世にもろもろの説があるけれども、破滅とか沈没とか滅亡とかで読者をカチカチ山のように泥舟にのせるような話ばかりで、実際に楽土にゆくという話はない。たまに耳よ

あいが若夫婦の間で演ぜられたが、一時は格闘にまで進み、どうなることかと目を見張ったが、それは妻の手に帰した。夫はあきらめず取返そうとしたが、妻に棒でなぐられた。しかし夫は笑いながら耐えていた。外の土人もそれがあたり前だというふうに笑いながらながめていた。

男の仕事はなにかという家を建てることと、工業製品たとえばラジオなどを手に入れる場合、オーストラリアドルでないと買えないから、どこか出かせぎにゆきオーストラリアドルを獲得すること。しかしあまり働く場所はないから四十すぎれば遊んでいようだ。それと鳥に大きな木がある場合、それをとり払うのは男の仕事である。祭りとか踊りの類も男が主役だが、たいてい日常はブラブラしている。

*

トベトロ氏のめしだという声に暗い家の中に入ってみると、赤ん坊の頭のようなサツマ芋が三個机においてあり、鍋のような入れものにはどこで手に入れたのか、インスタントコーヒーのうすいのが入っていた。

あまり芋が大きいので、とても食えないという、「遠慮するな」と大きな手で肩をた



たかれた。

芋はブタの油と水を混ぜたもので煮てあり、油気たっぷり塩気もない。その上に日本で一番大きくてまずい農林一号とかいう戦時増産型の芋だから、まずくて食えない。彼らがいとも食べている芋の方がうまいのだが、彼らはブタの油を使うのが御馳走だと思っているので、何度言っても、この油気たっぷりの芋で閉口した。

一個だけ部屋のすみにかくし食ったことにして、もっぱら鍋のインスタントコーヒーをすすったが、あとで残した芋を子供とトベトロの妻がとりあいをしていた。

その動作は鳥のように素早かった。どうやら子供の口には入らなかったようだ。

*

だいたい土人は大地に椰子の葉を敷いて寝るていどだが、どうしたわけかぼくの寢室はベッドだった。しかし急造のものらしくうっかり片方に重心をおくとシーソーのようにうごく。それも全体でなく敷いてある板がそれぞれさまざまな形でシーソー状になるので、うっかり動けない。重心は常に中央において動作しなくてはいけない。

夜になったが電気はない。夕方二、三時間、

りな話があると思うとパルスチナゲリラかなんかの話で、どうしようもない。

異次元とかオカルトとかいっても所詮アマでそう感じてみるだけのことで、いつまでたっても足はこの苦界に立っているのだ。

霊堂とか四次元の世界とかいうものもあるが、行ってみると、釘がまがったから霊能力があるとか、奇妙な写真を見せてプラズマだとかなんとかいつて劇画にもならない霊魂マニアたちの貧弱なアイデアをみせつけられるばかりだ。

また、さまざまないかがわしい予言書が出ているが、これとても所詮一尺四方の書籍の中のこと、どうあがいても本の中に入れるわけのものでもなし、この苦界からのがれられるというものでもない。

*

我が紹介するあやしげな楽園では、まがりなりにも苦界を脱出し、奇妙な世界に立つことができるのだ。即ち異次元の園ともいうべきところに入ることができるのだ。

さて楽園に入る前に、木や鳥や虫けらと同じように自然の中に消えてゆく気持になることが大切であろう(あまり欲ばってはいか

ん)。これとても仏教のネハンとやらを得るためのはげしい修業を考えれば一介の虫けらとなる決意くらい大したことではない。

*

さてラバウルから一時間ばかり、前歯の全部抜けた土人の運転手(この運転手も三年前には前歯があったから多分最近自治をゆるさされて輸入したチョコレートのみすぎが悪かったのだろう)が「あう」と動物とも鳥ともつかぬ声を出すともう楽園に着いたのである。

まずイナゴの大量のような子供に襲われる。子供は親愛の情を示してだきついてくる。土人の子供の泥で服が黒くなった頃、酋長のトベトロ氏、その下僕兼副酋長(これはトベトロの妹をもらっている)トマリル氏、元村長(戦争時代ツルツルという村長のような役を引受けていた)トワルワラ氏、これは森から出てくるとオランウータンと間違えう。それと白髪の富豪(富豪といっても貝貨が他の土人よりひとまわり多いだけ)チアラ老、それとこの地区の精神的支柱、キリストマスターの白人の老牧師、顔は木喰に似ていた。いずれも文明社会ではめったにおめにかかれないような奇妙なオッサンたち。

部落といっても小高い平地を十二、三軒ばかりの家が心地よさそうにそれぞれの地形を利用して建てられて中央に広場がある。その住人はいずれもトベトロ氏の親族に限られているようだ。富豪のチアラ氏と元村長のトワルワラ氏は別な平地にそれぞれ独得な方法で鳥と家を配置している。

いずれも目のさめるような緑で、灰色の日本では考えられないような鮮やかさだ。

*

ここでは女のことをメリーといい、色は黒いがなかなか美人もいるし、なによりも従順で素直だ。男はメリーを一人もらえばもう一生餓死するようなことはない。メリーは鳥仕事(土地はいくらでもあるから物を植えさせずればそれで鳥と化す)と食事に育児、即ちメリーは生活に必要な一切のことをするとみて間違いない。だからメリー一人めとりさえすれば男は一生安楽が保証されたようなものだ。メリーの方は天地自然がそのように命じていると思っているらしく、なんの不満もせずモクモクと働く。

しかし男より女の方がどうやら地位が上で、というのは土産のトランジスタラジオの奪い

チアラ老は「今日私の家で秘密の踊りがある。しかしこれはカナカマネイ(貝貨)を捧げるしきりになってる。それも少々ではない、私とその貝貨をサービスするからみにこい」という。

横からトマリルが、これは祖霊の踊りであり、女に言うてはいけない。また女の前で踊りの話をしてはいけない、という。

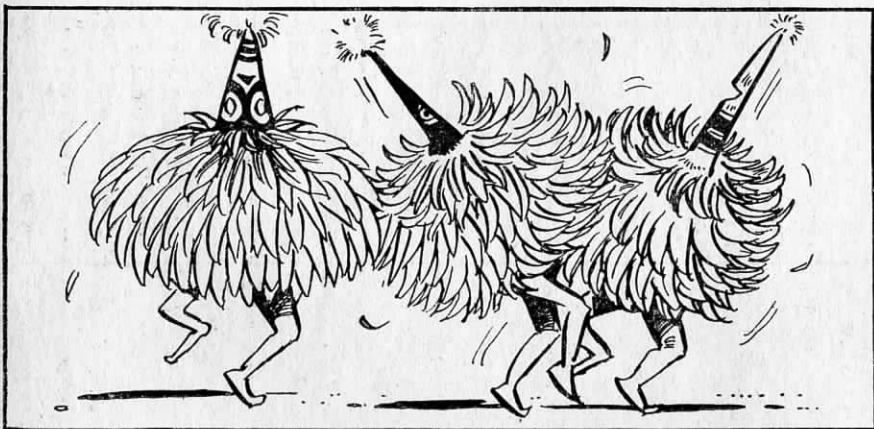
狩りにゆくと一言で二十人位の者が弓やゴムのパチンコをもってついで来たがあまり多すぎて、かんじんの鳥が逃げてしまう。

村の長老協議の結果、富豪のチアラ老、元村長のトワルワラ氏とトマリルの三人でゆくことにした。

どんな鳥がとれるだろうかとハラハラしながら行ったが老人たちのためか一つも命申しない。一発位当たっても弾に力がいらずしく落ちてこない。

こんどは川に向かって弓をはなつたが、六十本はなつてやっと一匹だった。「下手くそだ」というと、「そんなにやたらに獲れたら獣の楽しみはない。少しとれるから面白いんだ」とトワルワラ氏は巨大な口を開いて焼魚の頭を食べた。

*



言葉はカタコトであまり通じないから、ボヤボヤしているとジャングルの妙な道へ入らされる。何事かと思っていると、どうやら踊りの開始だったらしい。

奇妙な形ものが現れジャングルの小広場で踊っている。これはドクドクというものだった。こちらに向って頭をさげるので手にした貝貨を捧げる。

その踊りは長く続き、何人かが交代で踊るが、その交代のさまをカメラでとったり8ミリでとることはゆるされない。

始めは歌も踊りも単調だったがだんだんと熱が入り、いつしか二、三十人の人間が混然一体となる。すると妙な夢うつつのような一種の陶酔の状態になる。するとドクドクは一体から二体三体遂には四体となり歌は絶叫に代り彼等のいう祖霊というやつが入りこむのであるうか、なんともいえないいい気持ちになる。

踊りを始めてみて、ぼくが土人の踊りが踊れるようになってるのには驚いた。多分彼等の祖霊が歌と共に毛穴から入りこんだのであるうか。踊りはエンエンと続き、明け方に終わった。

ぼくは必死になって写真をとろうとしたが、

暗いランプがつけられるだけで。文字なんかみえないから夜は寝ざるを得ない。

自然はよくしたもので虫と鳥がさまざまな音楽をかなで、外に出ると星が大きく、まるで夢の国にきたようで、土人は毎日夜星をながめるらしいが、「あきない」といつている。

さてぼくがトベトロの家をたずねるということは村中の評判になっていたらしく、村人はモンキーバナナ(小型で甘い)とかマンゴIとかパイナップルとか部屋中にもつてきていた。トベトロは、「夜中にジャングルからへんな動物がきて鼻の頭とかバナナをかじるから注意しろ」といった。トベトロの息子にきくと、ルラット、とまげ舌で大きな声でいうのでジャングルから怪獣もどきのものがやってくるのかと恐怖すると、どうやらラットであるということが分った。

安心して寝ようとするときとクーとかガーとかいう妙な声がする。

おかしいと思つてトベトロを呼ぼうとベッドの上に立ち上つたのがいけなかった。シーソーベッドは重みに耐えかねたのであろう、中央に足状の穴があいた。

足はやんわりとした肉体にふれて二度びっくりした。なんとベッドの下に土人が寝てい

たのである。しかも大きな口をあけていびきをかいているのだ。熟睡というやつであろう、口の中に鼠の糞ネズミのようなものが二、三個落ちたが、いびきは少しもみだれなかった。ベッドの下で寝るなんて考えられないことだ。

一人だとばかり思つて小便にゆこうとランプをもち上げると、なんと部屋の隅にゴロゴロと土人が寝ていた。色の黒いものが暗いところにているから分らなかったのだ。

なるほど土人とはよく言つたものだ。これではなくちやあ木や虫と共存できない。

*

朝になって糞はどこだというとき、「そこらにしとけ」と重大なことをトベトロはなんでもないようにいう。

指さした方向にゆくと坂になっている。なるほど木の根につかまりながらするというわけか、と一人合点して糞をして目と目の前にゴリラの糞のようなのがうず巻状にあるではないか。はっとおどろいて位置をかえようとしたが静かにみると至るところに新糞が横たわっているではないか。

これはたまらん、と思つているとトマリルがみにきて「チンポオオキカ」という。チンポどころではない、この糞はどうなるんだ、

というと、豚がいま柵かごに入れてあるから、あれを出せば、みんな喜んで食べてしまうから心配ない、という。

なるほど行ってみるとブタがジャングルの中に柵を入れてあった。

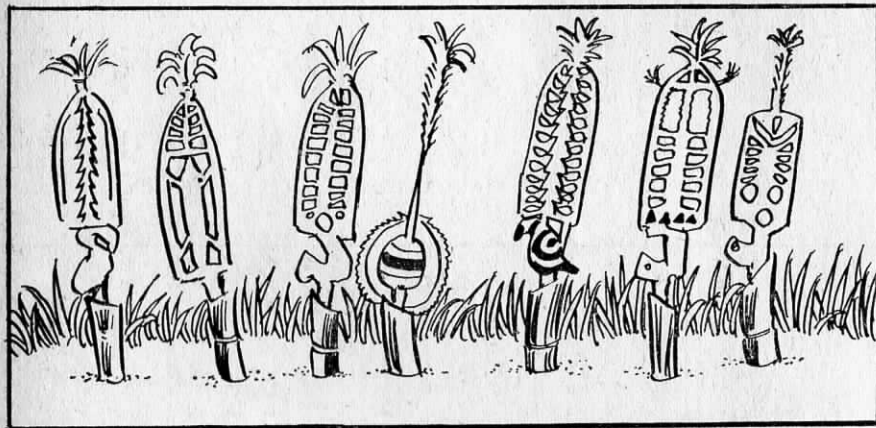
あわてたため手に糞の小片がついたので手を洗おうとドラム鐘ねの中から水を吸みあげると、なんとボーフラで真黒。すると毎日のコーヒーはブラックコーヒーでなくボーフラコーヒーだったのか、と一時は気持が悪くなったが、なにしろこちらは原始生活を信仰して苦界の民に楽園を紹介している身分、なににボーフラ位「ふ」を食っていると思えばなんでもない、と思いたかったが、コーヒーはなるべく上の部分だけのむことにした。

*

トベトロは遠来の客のために今日もブタを殺しブタとタロ芋をバナナの葉にくるんで石焼にしようとしていた。

トベトロは目を細めながら「タロとブタを煮ると一番うまい。そいつをお前にたくさん食べさせるから」という。これはたまらん、と思つて、今日は狩りにゆく、夕方かえるからパンの果を焼いてくれればそれでよい、といった。

トベトロは「最近悪いことにビールが入りこんできて、酔ったやつが時々石で頭をな



きなかつた。

子供も若い者も老人には親切だ。特に病人は大切にされる。
なにも無いのに、なにもかも備わっているのだ。

トワルワラたちは三十年前の思い出話に花をさかし、そこはアロルの行なわれる場所で、竹と空音をそれぞれがもってきた。

歌劇「アロル」は開始されたのである。
独唱と合唱は交互に行なわれ、陶然とした頃、さまざまな色をつけたポポポコと称するものを両手にもって一団が現われ、集団の踊りが始まる。すると、元村長は一段と声をはりあげて例の陶酔ぐせがはじまる。夜になってもやめようとしなない。トマリルが注意すると、「クリスマスだ。かまうものか」と元村長は平気だ。

あくる日は私が帰る日だったからトマリルが「トベトロ、ビンタサービス」とふるえる。

早く帰らないとトベトロになぐられる、というのだ。トマリルは弱くて元村長に言えないらしいのでぼくが、帰る、というと踊りは中止されたが、道の途中でトベトロに出会った。

昔、エプベという美人がいたがどうしてい

文句をいうので8ミリを写したが一体の時は問題はなかったが、クライマックスの三体から四体の出現の個所はどうしたわけか写っていなかった。そして妙な景色が写っていた。それが三ヶ所あり不思議でならない。

その場所でフィルムを入れ、その場所にかいかなかったのに、他の場所が写っている。あけ方になって踊りが終わっても元村長のトワルワラ氏はコーフンがおさまらず、踊りつつ帰路につくありさまだった。

その夜も星は夢の国のように輝いていた。ぼくはトベトロにドクドクの話をした。全く素晴らしい踊りだ、腰はひとりでに動き、手はひとりでに舞うといった。その通りだ、あの踊りはこの部落の長老がつかさどる踊りで女はみてはいけないが、トワルワラのつかさどる踊りは女もみてもよいし踊ってもよい、とトベトロはいった。

トベトロは星をみながらさかんに星の話が始める。その時トベトロの妻は遠慮がちにやってきた。コシマキの要求である。よかろう二枚送ろう、というときとキヤーといって大変なカンゲキぶりであった。

るかときくと、トマリルが横から「チンポヨロシクナイ」と言わなくてもいい警告を発する。あくる日トワルワラがやってきた。アロルという踊りに案内する、とオランウータンのような口をあけて笑う。

歩きかけると、驚いたことにどこでみつけてきたのか自動車(トトラック)である。勿論日本ではみられないようなポロ車だが、乗ると自動車は妙な方向に走り出した。

この道はココボにゆくのではないか、と思っていると、なんと昔美人だったエプベの家である。エプベは気もきくし頭もいいから、昔ぼくが好きであったものをあらかじめそろえていたとみえて(土人同士の連絡は我々では考えられない位早い)モンキーバナナ、カナカホーレンソー、パンの果、はてはタピオカ餅まで作ってあった。彼女は初めの夫に死に別れ、今では二度目だといって赤ん坊を二人抱いていた。

おどろくなかれ僕と彼女は年はそう違わないのだ。エプベの親父は八十歳だがまだ元気で、裸でノンキにくらしている。楽園では年齢なんかバカバカしくて考えられないのである。日本で五十近くになって赤ん坊でも生めば

大変なことだが、楽園ではだいたい女は七人から八人子供を生むから常に人手が余っている。日本みたいに老人が知らない間に死んでいたなんていうこともない。

楽園で子供をそだてることは、そんなに大へんなことではない。子供は捨てておいてもそだつ気候がよいし、食物だってある。勞せずして自然が養ってくれるのだ。

老子に「小国寡民」という言葉があるが、全く人口の少ない小さな国で、文明国が水爆をもとが石油のとりあいをしようが知らん顔して鳥や虫のように天寿を全うするのが幸福というやつであろう。文明社会には心配事が多すぎる。

さて楽園の人々は朝、鳥と共に起きると運動がてら棒一本で畠仕事をして夕方まで休息である。ぼちぼち暑い太陽が沈み、夜の怪鳥がさけび声をあげかける夕方になると、いずこからともなく現われてくる。そして広場の隅にある小高いところにある竹のイスに坐り話す。今日のニュースとか、遠くに働きに行つた者がかえつてきてその話をするとか。

テレビも新聞もないが毎日の生活はたのしい。むしろテレビとか新聞は幸福の邪魔になるのだから。

ぐることがある。特にクリスマス夜の夜に多い」ということだった。

楽園では長い間アルコールというものがなかったから、わずかのビールでも酔い暴行に及ぶらしい。

文明は楽園に悪いものばかりもってくるのだ。彼等の酒は長らくカナカウイスキーだった。檳榔樹の実とサンゴの粉末を口の中でまぜると酒のようなものになる。

もつぱらそれを愛用し文明国の酒はのまなかったが、悪いことに日本のビール会社が工場を作つたらしい。

いよいよ最後の日があった。エプベはわざわざ敷物を土産にもってきた。木喰のような顔の白人の老牧師は写真を土産にもってきた。

前歯のない運転手がやってくるのと同時に何百という手がワーンという歓声と共に握手をもとめて出された。まるで千手観音にかこまれたような気持になった。そして一本一本の手を握って握手をするうちに、手を通じて

土人の魂が入りこんでくるのであろう、「ぼくは必ず楽園にかえってくるぞ」といつしか固い決意になってくる心をどうすることもできなかつた。